

文学館だより

令和 4年 3月 1日
若山牧水記念文学館
TEL 0982 - 68 - 9511
文 責 日 高

ご愛読ありがとうございます。近所の方から「^{りやうりやうしやう}があつたっちゃんえ。」と声をかけてもらったり、「読みました。」と電話をもらったりすることがあります。令和3年度もあれやこれやお伝えしてきましたが、^{まきこ}切に追われ反省しきりです。来年度こそは・・・と思う年度末です(^o^)/

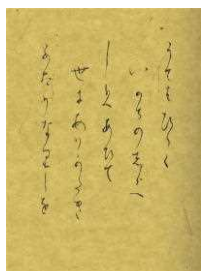
三浦家寄贈資料公開展 第3期

3月13日(日)～5月29日(日)

三浦家寄贈資料公開展 繁と敏夫 ー受け継がれた二人の絆

これまで第1期、第2期と開催してきた「三浦展」も、いよいよエピローグを迎えます。三浦敏夫の人物像に焦点を当てた第1期、牧水と敏夫に焦点を当てた第2期を終え、第3期「敏夫と喜志子」は、牧水没後の喜志子とその家族に焦点を当てます。

見どころ その1 ^{りやうりやうしやう} 寥々抄



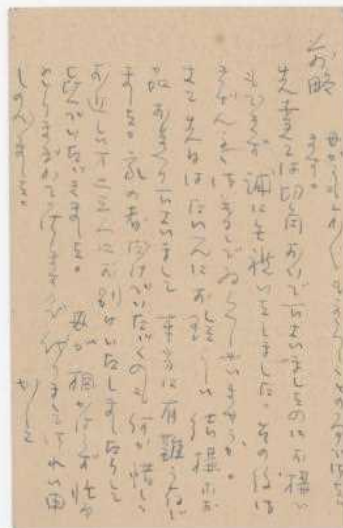
若山喜志子直筆の歌 100首本。後書きから昭和 13年 11月に完成したものとされる。牧水の「^{ひやくしよ かほしやう}百首歌抄」とともに、2冊とない大変貴重なものである。どちらも敏夫が製本を手がけている。

写真は「寥々抄」の1ページ

うてはひく
いのちのしらへしらへあひて
世にありかたきふたりなりしを

うてはひびく
いのちのしらべしらべあひて
世にありがたき二人なりしを

見どころ その2 ^{まきこ} 若山真木子はがき



左は、牧水の次女真木子が母喜志子に代わって敏夫に宛てたはがきである。敏夫が訪ねてきた時のお礼として持つてきた土産のお礼が書かれてある。消印が不鮮明で、いつのか特定できない。

今回は 50 点余りの資料を公開します。牧水亡き後も残された家族を思い、支え続けた敏夫。敏夫をここまでさせる牧水との強い繋がりや敏夫の人となりを堪能いただけたと思います。

敏夫、牧水没後は自宅に牧水歌碑を建立し、永遠に牧水を思ふ

優曇華の春に逢ひぬるこの石よ
牧水の歌と永遠に生くべし

除幕式終りて吾に幾日か
臍抜けの如き日がつづくなり

自宅に建立した牧水歌碑(現岩城郷土館)



これまでにお伝えしてきた三浦展に関する情報は、以下よりご覧いただけます。

若山牧水ホームページ

三浦家寄贈資料公開展 特設ページ

文学館だより 令和3年4月号、5月号、6月号、7月号、9月号、12月号

牧水と恋 ~うらこひしさやかに恋とならぬまに

「リーディング公演 牧水と恋 ~うらこひしさやかに恋とならぬまに」が先月、宮崎市で開催され、行ってきました。「リーディング公演」とあり、演者は台本を手演じられました。

大学教授の講演を聴いた女子大生二人と老婦人との関わりからストーリーは展開していく。牧水と園田小枝子の恋愛時代を追いながらそれぞれの「恋」を見つめていく。一人は「恋」とは気づかず、何か気になる男子学生の姿を追う。片やもう一人は身近な人を失い、自分は「恋」ができないと言う。その二人が周囲から助けられながら明日を見つめ歩いていく。



折々に、牧水が登場して短歌を朗詠したり、牧水と小枝子の回想場面が設定されていたり、現代の学生が詠む短歌が登場したりと趣向を凝らした演出満載でした。

作・演出を手がけられたのは藤崎正二氏。高校教員でもあり詩人でもいらっしゃいます。文学館とは、牧水・短歌甲子園をはじめとして大変関わりの深い方です。

今回の公演は、牧水の恋が素材であり、演劇と短歌が一体化しており、牧水短歌と現代短歌が融合しており、新しい牧水顕彰の姿を見せていただきました。現状が落ち着きましたら、多くの皆さまにもう一度観ていただくチャンスが来ることを願います。

注目しています 小学生歌人

ふうせんが九つとんでいきましたひきざんはいつもらよっとかなしい
(2020年当時小学1年生)

私は「朝日歌壇」を毎週楽しみにしている一人です。前から密かに気になっていた小学生歌人がいます。短歌も氏名もひらがなのので、1年生なのだろうか2年生なのだろうかと思像して読んでいました。

まさしく、この小学生歌人が朝日新聞「折々のことば」で先月紹介されました。注目していたのは私だけではなかったようです。

ランドセルもっておりたらニ字きがぼくのせ中にくっついてきた

これも同じ作者のもので、「2021年9月26日、朝日歌壇掲載」とのメモが残っています。

牧水先生の一首

折に触れて出会う一首を紹介しています

わが旧き歌をそぞろに誦しをればころんぎ来ぬいざ歌詠まむ

私の古い歌をそれとはなしに口ずさんでいけば、心が落ち着いてきた。さあ、またこれから歌を詠もうか。

「牧水の前に朗詠なし、牧水の後に朗詠なし。」と言われるほど、牧水は美声の持ち主だったそうです。一首詠むと朗詠したといひます。この歌を詠んだ時も口ずさんだことでしょう。もしかすると声高らかに朗詠したのかもしれないね。大正10年の作で、『山桜の歌』に収められています。

印象に残る歌に出会うと、私も詠めるようになりたいと思います。達成感とともに心穏やかになり、より牧水に近づけるのではと思うようになってきました。

今年度もあと1ヶ月。とりとめもなく書き綴ってきましたが、牧水のふるさとからみなさんへ牧水ニュースをお届けしてまいりました。1年間ご愛読ありがとうございました。来年度もよろしくお願いたします。牧水に関するニュースがありましたら、ぜひお寄せください。